

---

# Fate 戦いのはてに残るもの

地獄の傀儡師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e 戦いのはてに残るもの

### 【Nコード】

N 5 3 5 0 Y

### 【作者名】

地獄の傀儡師

### 【あらすじ】

青年は一人F a t e / s t a y n i g h tの世界に行く。ze r oの戦いで、得たものを見る為に。F a t e / s t a y n i g h tの夢小説です。前のF a t e / s t a y n i g h tに介入した青年の、設定とストーリーを変えた話になっています。よかったですら感想などください。

## 彼等の残した物（前書き）

介入する前の話です。

過度な期待はしないでください。暖かい目で、読んでくれるとありがたいです。

## 彼等の残した物

「間桐雁夜、この男一体何を考えていたんだ？」

俺の名前は、夜月彩雅。まあ、人殺しの仕事をしているろくでもない人間だ

仕事のない時は、漫画やアニメを見て、暇を潰しているかなりの変わり者でもある

そして今丁度、Fate/zeroの小説を読み終わったところだ

「何故、人の為に命を掛けることが出来る？」

Fate/zeroの、間桐雁夜という男。自分の命を削り、第四次聖杯戦争にバーサーカーのマスターとして参加

目的は、遠坂時臣が間桐家に養女に出した間桐桜を救う為

奴はその為に、身体に間桐臓硯の刻印虫を宿し、即席の魔術師となった

だがその代償はあまりにでかく、命を大幅に削り容貌は死人のように蒼白になり、魔術を使うだけで血を吐く程の苦痛を味わっていた  
何故だ？何故其処までして、一人の子供を救おうとする？

間桐の家から、逃げ出し間桐の呪縛から解放されたのに、間桐桜の為に間桐に戻り日常も命を全て捨てた

何故何だ？理解出来ない。他人の為に、其処までしてやる事が

奴の好きだった、遠坂葵の子だから救おうとしたのも、あるだろう

だがいくら何でも、普通其処までやるか？好きだった人の子供とはいえ、他人を其処までして救おうとする

俺には分からない。それが正しかったのか、正しくなかったのかわ

だが結果は、バーサーカーの宝具の解放に魔力を全て持ってかれ、刻印虫も全部喰われて敗北

聖杯戦争後、ギリギリ生きてはいたが間桐桜の目の前で、間桐桜を

助けた幻影を見ながら死亡

更に死体は、間桐桜の目の前で蟲に食われた

この結果を見ると、奴は正しいどころか、参加しないほうがよかったんじゃないか？と思う奴も恐らくいるだろう

しかし俺からすると、只の馬鹿にしか思えない

自分の人生も、生活も命も捨てて他人の為に、しかも子供の為に死ぬなど。そして結果は、さっきも言った通り助けられずに、助ける奴の目の前で死亡

まあ、人には人の考えがあるのだろうが、俺には分かんない

そして、もう一人気になるのは衛宮切嗣。正義の味方に憧れる、理想主義者。だが、第四次の戦い方を見ると、正義の味方などと全く思えない戦い方だった

まあ、勝つために手段を選ばないのは、分からないことはない

だが最後に奴は、救う筈の多くの人間を、聖杯を破壊したことで殺

した

だが、聖杯の正体を知って絶望するのは確かに分かる

聖杯は、人を殺すという方向性を持った、呪いの魔力の渦と化すようになり、人を貶める形でしか願いを叶えられない欠陥品などと、分かれば確かに破壊するかもしれない

「っと、こんなこと考えてても仕方ない」

所詮は、アニメの話。深く考えたところで意味はない

特に、やることもなくなったな。仕事もないし、読む小説も漫画もなくなった。今から何をしよう？

「暇なようだね」

何だ？突然声が聞こえた。だが周りには誰もいない

「誰だ？」

自身の刀の柄に手を置き、尋ねる

「暇なら、連れて行ってあげよう。その世界に」

「何を言って・・・っ！」

何だ！？目の前が、真っ白になって・・・いく。俺は意識を失い倒れた

あれから、何分たったか分からない。目が覚めると、俺は知らない場所にいた

「・・・此所は、何処だ？」

目の前に広がる光景は、只真っ白い空に白い地面。まさか、この前殺したマフィアの残党に捕まったか？

だがそれなら、こんな所に連れてこずにすぐ殺されてるか

なら此所は一体？



「驚いているようだね」

声が聞こえ、刀の柄に手を置き振り返ると

「誰だ？お前は？」

其所には、白い服を着た青髪の青年が立っていた

「誰だと言われてもね。まあ簡単に言えば、平行世界を管理する管理者の一人だよ」

平行世界。幾つもの、選択などによって枝分かれする世界のことか

「その管理者が、人殺しの仕事をしてる俺に何か用か？」

青年を、睨みながら問う。警戒は勿論緩めない

「君が、暇そうにしてたからさ。でものは相談何だけど、他世界に行ってみないかい？」

「ほう、他世界か。・・・いいだろう。行つてやる」

丁度暇だったし、仕事の依頼もなかったからな

「へえ、何か聞かれると思ったんだけどな。予想外だよ。じゃあ、行く世界はFate/zeroの世界でいいかい？」

コイツ、俺がFate/zeroを読んでいたのを知っているようだな

更にちよつとだけ、行きたいと思っていたのも知っているようだな。だが

「いや、Fate/stay nightの世界に行かせてくれ」

「へえ以外だな。理由を聞かせてもらえないかい？」

「確かに、Fate/zeroの世界に行けば、色々と分かることがあるだろう。だが、結末を知っている世界に行っても、つまらないだろう？」

結末が分かる故に、それを変えようとした結果、話事態が変わってしまったら知識があつても意味がない。ならまだ話を知らない、Fate/stay nightのほうに行ったほうがいいだろう？

「ほう。言うねえ」

「それに・・・戦ってみたんだよ」

「ほう」

「知識のない状態で、サーヴァントと真っ向から戦ってみた。それと・・・」

「それと何だい？」

「見てみたいんだ。第四次聖杯戦争を、やった結果何が残ったのかを」

あの戦いで、一体何が残ったのかを見たい。特に、悲劇や悲しみ以外で

「別に僕は、どっちでも構わないけど。本当にFate/stay  
nightでいいの？」

「構わない」

「それじゃ、行く世界は決まった。後は君だね」

君？どういう意味だ？俺に何かするのか？

「もう、行くんじゃないのか？」

「はあ？今の君の力のままで、行かせたって負けるのは目に見えてるだろ？それとも、君はその不安定な眼と多少の剣術だけで、どうにか出来ると思ってるのかい？」

やはり、眼のことも分かるか。流石管理者だ

「無理だな。この眼は、安定していないから最高でももって3分だしな」

切り替えは出来るが、開眼状態は全く維持が出来ない。そして、開眼すると頭には激痛がはしる。正直に言うと、開眼何かしたくないしな

「だから、特別に君の願いを5つだけ聞こう。さあ、言ってみてくれ」

・ 願いを聞く？何かしら、5つお願いすれば力をくれるのか？なら・

「まず一つは、右腕をデビルブリンガーにしてくれ、閻魔刀とデビルトリガー発動付きでな」

「まず一つね」

「二つ目は、うちはサスケの忍術と写輪眼、そして写輪眼の術を全て使用可能にさせてくれ」

「はいはい。二つ目ね」

「三つ目は、頭に思い描いた武器や盾を瞬時に出せる創造という力が欲しい」

「三つ目もいいよ」

「四つ目は、飛天御剣流を使用可能にしてくれ」

「次でラストだよ」

「ラストは・・・身体を治癒し、体内に巣くう物を消し去る刀をくれ」

「これで全部かい？決めるなら、もう変更は出来ないよ？」

「それで構わない」

「分かったよ。ああちなみに聖杯戦争だから、君にもサーヴァント一体ついでに挙げるよ」

「いいのか？其処まで力を与えて？」

「問題はないよ。ああサーヴァントは、あっちに着いたら召喚出来るようにしとくから、召喚しなくなったら召喚して。後力は、君があっちに着いたら使えるようにしとくから」

管理者がそう言った瞬間、また俺の目が霞んできた。遂に行くのか

見せてもらっぞ。第四次の戦いで、何が残ったのかを

彼等の残した物（後書き）

次回から原作に介入します。

ではまた次回

目が覚めたら其所は（前書き）

今回から介入します

戦闘シーンは難しいです



目が覚めたら其所は

「・・・此所は？」

目が覚めると、其所はさっきまでいた空間ではなく、何処の建物の中に俺は倒れていた

起き上がると、目に入った物は机に椅子 教卓 黒板

何処かの学校？に、俺はいるようだ。教室内は、暗く夕陽が若干射し込んでいる。恐らく今は夕方か？

だが今は、時刻を気にしてる暇はない。学生でもない俺が、学校の校舎にいるのを、教師に見つかったら面倒なことになる

そう思い教室？の後ろのドアから出た瞬間

「な！？」

「あん？」

出てすぐ右側の壁に、全身青タイツ？のような格好をした男が、此所の生徒？と思われる茶髪の生徒の胸に、槍を刺していた

「ち、まさか一日に二人も始末しなきゃならねえとはな」

槍を持った男が、生徒？に刺さっていた槍を抜き俺に構える

何てことだ。コイツは恐らくサーヴァント。クラスは恐らく、槍を持っている為ランサー

まずいな。こんな校舎の中で遭遇するとわ

「まずい！」

直ぐに左を向き走り出し、階段を降り下駄箱まで来たが

「けっこう、足速えな坊主。だが見られたからには死んでくれ」

「くっ！」

咄嗟に槍の正面からの突きを、自身の刀で弾き軌道を右に変え距離

を取る

「速い」

「少しはやるようだな坊主。だが！」

「ちっ！」

ランサーは即座に距離を詰め、俺に突きの連撃を放つ。正面 上下 左右からくる、突きの一撃一撃を俺は目で追い、避けれるものは避け無理なものは、刀で軌道を変え反らす

「何だ？攻撃してこねえのか坊主？」

話ながらも、ランサーは攻撃の速度は緩めない

「残念ながら、お前が攻撃を止めない限りそれは無理だな」

迫りくる突きを、反らしながらランサーに言う

「そうかよ」

「はっ！」

突きのスピードが上がり、頬をかすった

「悪いが、個々からは本気で行かせてもらっぜ」

「くっ！だが！」

スピードが上がり、些か同様したが何とか目で追い、また同じことをする。回避し軌道を反らし続ける

このままでは、埒があかない。だが、だからと言って仕掛ける訳には・・・

「苦戦してるようだね」

頭に声が、奴か

「ああ、返事はしなくていいよ。もう君には力は与えた。忍術も写輪眼も、口か心の中で言えば使用可能だから。後のことは落ち着いた時に伝えるよ。じゃ」

もっと早く言えよ。まあいい。・・・やってみるか

刀を鞘に収め、ランサーに真っ正面から突撃し

「漸く、反撃する気になったか！」

再度俺に向けてきた正面からの突きを、回転し避け

「飛天御剣流 龍巻閃・旋！」

ランサーの身体から、血が飛び散る

「何!？」

突きを利用し、カウンターでランサーに抜刀し、左腹部から右の胸板までを斜めに斬り裂き、再度距離を取る

「傷が浅い」

恐らく咄嗟に身体を後ろに下げて、斬撃をダメージを減らしたのだろっ

「驚いたぜ。まさか、カウンターで斬られるとはな」

「咄嗟に後ろに下がって、ダメージを減らしたアンタに俺は驚きだよ」

「は、言ってくれるじゃねえか。だが、また誰かに見られても面倒だ。我が必殺の一撃で終わらせる」

ランサーは再び槍を構える。何だ！？槍から凄い何かを感じる。これはまさか宝具を使う気か！

「写輪眼！」

宝具に備え、写輪眼を使い構える。避けれる宝具なら、回避し奴を仕留める。万が一に備え、ある術を心の中で言い発動する

「貴様の心臓、貰い受ける！」

「やってみろ！必ず避けてやる」

「ふっ、刺し穿つ死棘の槍！」  
ゲイボルグ

「!？」

槍を回避しようとしたが、槍の攻撃を目で見る前に、ランサーの槍が俺の胸を貫いた

馬鹿な！写輪眼でも見切れないだと！

「な・・・に。馬鹿・・・な」

俺は口から、血を吐きその場に倒れた

ランサー side

「漸く、仕留めれたぜ」

俺は今槍を、坊主の胸から引き抜き坊主を見る

この坊主、人間にしては中々だったな。この俺の槍を回避し続け、逆にカウンターでこの俺を斬る何てな

だが今度ばかりは、俺の宝具をまともに喰らったんだ。生きてはいねえだろ

「俺とあっちまうとは、運がなかったな坊主」

「確かに、こんな所で会うのは予想外だったよ」

「何!？」

俺は、後ろから声が聞こえ振り返った。其所には、さっき俺のゲイボルクを喰らった筈の坊主が立っていた

ランサー side out

「馬鹿な!確かに、ゲイボルクはお前に直撃した筈!」

かなり驚いてるな。だが確かに、今のはまともに喰らったら死んでいた

「確かに、アンタの槍は俺を貫いた。しかし、俺は生きている。種



明かしはできないがな。解」

写輪眼の究極の幻術イザナギ。不利な事象を夢にし、有利な事象を現実にする。さっきの状態では、槍が心臓を貫くのが夢になり、貫かなかったのが現実となったのか？この術は、よく分らんがまあいいか

「まだやるか？なら出来れば、人目に付かない場所で殺りたいんだが」

「俺のほつもまだ、殺り合いたいが残念ながら、帰還しろとの命令が出た」

ランサーは、俺に背中を向けそう言う

「そうか」

「お前名は？」

「夜月・・・夜月彩雅だ」

「なら覚えとけ彩雅。貴様の心臓俺が貰い受ける！それと、隠して

んのか知らねえがその眼と腕バレバレだぜ」

そう言うと、ランサーはその場から消えた

「どうにかなったか。だが・・・バレバレか。先ずは此所から離れよう」

「待ってくれ！」

外に出ようとしたら、先程見た茶髪の生徒？が此方に走ってきた

「何だ？」

「てお前、彩雅！」

は？何でコイツ俺の名を知ってる？

「お前は誰だ？何で俺の名を知ってる？」

「何言ってるんだよ。お前、俺と同じクラスじゃないか」

同じクラス？既にそういう設定に俺はなってるのか？

でも、服装が学生服じゃねないのに何とも思わないのか？

そう思い、今の衣服を確認すると俺の格好は、目の前の奴と同じ学生服になっていた

(どうなってる？)

まあそのことは、後で奴が教えてくれるだろう

ところでコイツ、見覚えがあるな。・・・まさかコイツが

「・・・お前、衛宮士郎か？」

「何言ってるんだ？当たり前だろ」

コイツが、衛宮切嗣が唯一救えた少年か。でかくなつたな。まあ、第四次から10年ぐらい経ってるから当然か

まさかこんなに早く、会えるとは思わなかったが

「そんなことより、さっきの奴は何なんだ！？何でお前は、アイツと戦ってたんだ！？」

今コイツに、余計なことは言わないほうがいいな

「奴が何なのかは知らん。戦ったのも自衛の為だ。戦わなければ殺されてたからな」

「そうか。・・・やっぱり彩雅も知らないのか」

「ところで、何でお前は生きてる？」

確かにランサーの槍は、衛宮の心臓に刺さっていた筈。なのに何故衛宮は生きている？

「見てたのか俺が刺されるところを。それが、俺にも分からないんだ。気が付いたら傷が塞がってて」

目を見る限り、嘘ではないようだ。まさかzeroのアイリスフ  
イールのように、衛宮の体内に全ては遠い理想郷<sup>アウァロン</sup>を埋め込んであるのか？

衛宮切嗣のことだ、あり得くはないだろう

体内に、全ては遠い理想郷アヴァロンがあるのならセイバーがいれば、確認出来るのだが

確信するまでは、このことは衛宮には黙っておこう

「とりあえず、送ってやるよ。またアイツが来るかもしれないからな」

「ああ悪いな彩雅」

「気にするな。じゃあ行くぞ」

俺は衛宮と一緒に、学校から出て衛宮邸に向かった

目が覚めたら其所は（後書き）

次回は衛宮邸での話です

では次回も宜しくお願いします

## 衛宮邸での戦い（前書き）

題名の通り衛宮邸で戦います

では宜しくお願いします

## 衛宮邸での戦い

「ありがとうな。送ってくれて」

現在俺は、衛宮と共に衛宮邸に帰還した。特に襲撃などもなく、無事に帰還出来た

「気にするな。クラスメートが、また殺されかけたらシャレにならんからな」

「そ、そうだな。よかったら上がってかないか？お茶ぐらい出すけど」

「なら、御言葉に甘えてお邪魔させてもらっ」

「ああ、どうぞ」

衛宮と一緒に、衛宮邸に内に入る

本当は、一応室内まで行って安全か確める為何だがな



それにしてもでかい家だ。切嗣はいい家に住んでたんだな。俺も何時か、こんな武家屋敷に住んでみたいぜ

居間に案内され、座って待っていると衛宮がお茶の乗った盆を持ってきた

「どうせなら、家で飯も食べてくか？」

お茶を目の前に置き、衛宮が聞いてきた

「お前がいいんなら、また御言葉に甘えさせてもらっよ」

素直に、人の厚意は受け取っておこう

「悪いが、ちょっとトイレ貸してくれないか？」

お茶を飲み、一息ついたところでトイレに行きたくなった

「いいぜ。トイレは・・・」

衛宮からトイレの場所を聞いて、俺は居間を出てトイレに向かった

数分後、トイレから出て居間に戻ってみると衛宮の姿がなく

「よう、また会ったな彩雅」

「俺が、いない間に襲撃かランサー？」

ランサーが、外の庭に立っていた

「お前俺が何か知ってるようだな。もしかするとお前が七人目か？」

七人目？マスターの話か？ランサーの言葉から察すると、まだ七人揃っていないのか？

「俺が魔術師に見えるか？」

「見えねえな」

「ところで、もう一人茶髪の奴がいたろ？何処にいる？」

「坊主なら、あっちの土蔵にぶっ飛ばしたぜ」

ランサーが顎で示す先に、扉が壊れた土蔵があった。まだ殺されてはいないようだな

「当然、俺も殺す気何だろ？」

「見られたからにはな。それに、俺のことを知ってるんなら尚更だ！」

「ならば、お前を倒す！」

同時に飛び出し、俺の刀とランサーの槍がぶつかった

「飛べ！」

その数秒後、左腕で槍を掴みランサーごと投げ飛ばした

「それが、隠してたてめえの左腕の正体か？」

ランサーは、何事もなかったように着地し俺の左腕を見る

「ああ、どうも腕が疼くんで解放した」

左腕は現在、悪魔の腕 デビルプリンガーになっている。凄い腕力だな。サーヴァントを武器ごと投げ飛ばすとは、本来の俺の腕力の数倍はあるだろう

「隠してる時と今じゃ、発してる魔力が桁違いみてえだな」

「当然だ。魔力を抑えて普通の腕にしてるんだからな」

ランサーに言った後、瞬時にランサーの目の前に接近し

「飛天御剣流 龍翔閃！」

飛び上がりながら、斬り上げをランサーに放ったが

「甘めえぜ！」

だがランサーは、斬り上げを身体を右に反らし回避した

「飛天御剣流 龍槌閃！」

だが俺は、その後上空で落下を利用した剣撃をランサーに続けて放った

「ちっ！」

ランサーは、槍を横に構え盾にし斬撃を防ぎ、槍の横風ぎで俺を弾き飛ばした

「やはり、右腕では力が足りない」

「敵を目の前に、余所見とは余裕じゃねえか！」

「余裕の訳がないだろ！」

刀を左腕に持ち、目の前のランサーの槍の一撃を弾き、蹴りを見舞うが槍で防がれた

「最初やった時より力が全然違えな。その腕の力か？」

「俺が言うと思うか？」

再度くる槍の一撃一撃を、俺の斬撃で相殺しながら答える。それにしてデビルプリンガー凄い力だ。通常の俺の力では、軌道を反らすだけで精一杯なのにな

「このままじゃさつきと同じだな。二度目だが、我が必殺の一撃で」

「なら、お前にも喰らわせてやるよ！必殺の一撃を！」

右手にゲイボルクを作り出し、刀を鞘に納め構える

「てめえ・・・何故俺のゲイボルクを持ってやがる！？」

「教える訳がないだろ。・・・先に言っておくが、このゲイボルクは本物だからな。ケルト神話の光の皇子 クーフリーン」

「俺の真名まで・・・面白れえ！どっちのゲイボルクが勝つか、勝負と行こうじゃねえか！」

ランサーも再度俺に構える

「いいだろう。・・・行くぞ！」

「刺し穿つ（ゲイ）」

「死棘の」

しかし真名開放の直前

「「!？」」

俺とランサーは何かを感じ、同時に土蔵を見た

土蔵の中を見ると、中は赤い光で包まれていた

衛宮 side

さっきの、槍の男に蹴り飛ばされて土蔵に吹っ飛ばされ、絶対絶命だと思い扉の外を見たら、彩雅が戻ってきた

彩雅に、逃げると言おうとしたが奴が槍の男と、戦い初めて何も言えなくなった

何だ？彩雅のあのスピードは？普通なら、避けることが出来ない槍を彩雅は自分の刀とぶつけた

更に驚いたのは奴の左腕。今日会った時、何か変だと思っていたが奴の左腕が突如、人の腕ではなくなり全く別の腕になった

何だあの腕は？それに発してる魔力が、さっきとは違い遥かに異常になっている

そしてまた戦闘が始まった。彩雅はあの槍の男と、互角に渡り合っている

俺は手も足も出ず、土蔵に吹っ飛ばされた。正義の味方を目指す俺が、殺されかけて守られている

俺は自分に苛立ちを覚えた。だがそう考えている時、床に書いてあった魔法陣が赤く光り出した

「な、何だ！？」

目の前が光りに包まれ、目を開けると



「問おう。貴方が私のマスターか？」

目の前には、青い鎧を着た少女が立っていた

「ますたー？」

何のことか分からず聞き返す。すると彼女は俺の手の甲を見て

「サーヴァント セイバー召喚に応じ参上した。私の剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私とともにある。ここに契約は完了した」

そう言われるが、状況をうまく飲み込めない

「マスター？サーヴァント？」

「はい、その令呪が私のマスターである何よりの証拠。・・・マスター、表にサーヴァントの気配を感じます。マスターはここに」

セイバーはそう言い、土蔵の外に向かおうとする

「待て！何をする気なんだ？」

「敵を討つのです。マスター、この聖杯戦争必ず私がマスターを勝利に導きます！」

セイバーはそう言うと、土蔵の外に出て行った。俺も少し考えた後土蔵を出た

衛宮 side out

数秒後、土蔵の中の光が消えた。何だ今の光は？

「まさか、あの坊主が七人目のマスターだと！？」

七人目？衛宮が最後のマスターだったのか！？ならさっきのは、サーヴァントが召喚されたのか？

そして突如土蔵の中から、青い何かが俺とランサーを攻撃してきた

「ちっ！」

「危ないな」

ランサーは槍で防ぎ、俺は後方に避け回避し前を見ると

「何!」

俺は目を疑った。目の前にいるサーヴァントを見て

(第四次のセイバーだと? 同じサーヴァントが召喚されたのか?)

目の前にいるのは、確かに第四次のサーヴァント セイバー。確か  
真名はアルトリア・ペンドラゴンだったか?

(これも何かの因縁なのか?)

セイバーは俺を無視し、ランサーと戦闘を開始した

「ぐ、不可視の武器か? だが貴様のその武器は剣だな?」

ランサーが、セイバーの横風ぎを槍で防ぐが吹き飛ばされセイバー

に問う

「さあどうだろうな。双剣かもしれぬし斧剣かもしれぬし、以外に弓かもしれぬぞ?」

いや、弓振り回して槍持った男を吹き飛ばす何て、出来る奴いるのか?

「は、言ってくれるぜ。今回の聖杯戦争、いけすかねえマスターにしみつたれた偵察任務。ハズレを引いたと諦めかけてたが、最優と名高い剣使いのサーヴァント セイバーが相手に出れるとは、俺も案外運が出てきたかもな!」

ランサーはそう言うと、セイバーと槍を交える。セイバーと戦うのが運がいいとは、コイツも俺と同じで強い奴と真っ向勝負がしたいって奴か?

「流石は槍兵のサーヴァント。凄まじい槍捌きですね」

セイバーはそう言いながらも、槍の突きを防ぎランサーと同じスピードで、不可視の剣を振るう。ランサーも、不可視の剣による一撃を回避し距離を取った

「やるじゃねえかセイバー。・・・この槍に掛けて貴様を討つぜ！」

ランサーが構えると槍に魔力が集中する。あれは・・・宝具を使う気か？

対するセイバーも、槍を避け迎撃しようと構える

「貴様の心臓貫い受ける！喰らえ。突き穿つ死翔の槍」  
ゲイボルク

ゲイボルクは目の前で放たれ、セイバーに直撃した。しかし

「く、う」

「何！交わしたと言うのか！？我が必殺のゲイボルクを！？」

確かにゲイボルクは、セイバーの胸に直撃したが致命傷は避けていた

あんなのが避けれるもんなのか？やはりサーヴァント、流石だな。  
俺には絶対真似できない

「ゲイボルク？それが貴方の宝具の名？なら貴方の真名は」

「ち、まずったぜ。まさか一日で二人に宝具を避けられ、真名がばれるとはな」

そう言うランサーは、背を向け塀の上に飛び乗った

「逃げるのですか？」

「生憎、マスターから帰還しろと言われてな。追ってくるなら命を捨てる覚悟で来な。・・・彩雅、お前の心臓次こそ貰い受けるからな！」

セイバーと俺に伝えたと、ランサーは消えた。その数秒後セイバーが俺のほうを見て構える

「俺は敵じゃない。・・・剣を納めてくれないか？」

「貴方のその腕と眼は、マスターのしょうがないになるかもしれない。それに、どのような手を使ったのか知りませんが、他人の宝具を作り出す力は危険です。障害になる前に貴方を射ちます！」

セイバーが俺に向かい、不可視の剣を振るう

「重い！」

ゲイボルクで、剣の軌道を左に反らし後ろに下がる

「マジで殺す気か？なら俺も容赦しない！」

ゲイボルクを構え、真名開放をしようとした時

「待てセイバー！」

土蔵の中から衛宮が出てきた

「何故ですマスター？この男は危険です。障害になる前に射つのが賢明です」

確かに俺は端から見れば、よく分からない奴だが其処まで言わなくてもいいだろ？

「駄目だセイバー。彩雅は俺を助けてくれたんだ。そんな奴を殺させれるかよ！」

「・・・分かりました。マスターが其処まで言うのなら」

セイバーは剣を納めてくれた。俺も腕を元に戻し、ゲイボルクを地面に落とすと数分で消えていた

「サイガと言いましてね。先程の、ランサーの宝具はどうしたのです？」

「使わないから消したんだよ」

本当は、何で消えたのか分からない為そう言うておく

「マスター、塀の向こう側から別のサーヴァントの気配を感じます。マスターは此所に！」

そう言うのと、セイバーは塀を飛び越え行ってしまった

（おかしい。致命傷ではないにしろ、ゲイボルクでダメージは与えられてた筈。なのに、衛宮が近くに來たら傷は治癒されてた。・・・やはり衛宮の体内には、全ては遠い理想郷アウァロンがあるかもしれない）



「彩雅！セイバーを追うぞ！」

「あ、ああ」

衛宮に呼ばれたので、考えるのをやめてセイバーの後を追うと、セイバーは白髪の男と戦っていた。更にその後ろには、ツインテールの女の子が一人いる

「ほう、遠坂凜がマスターか」

白髪の後ろにいたのは、成長した遠坂凜のようだ

「やめろセイバー！」

衛宮の左手が光り、セイバーが攻撃を止め止まった。まさか令呪を使って止めたのか？

「何故ですマスター？目の前に敵がいるというのに、令呪を使って止めるなど」

「まだ俺は、そいつが敵なのか確めていない。そうだとっても殺す

「ことはないだろ？」

「甘ちゃんだな。まあ聖杯戦争のことを知らないのでは無理ないか？」

「随分甘いよね。敵を前にして」

「その声遠坂か！？」

「今晚は衛宮君。・・・それと夜月君」

「ご丁寧に俺にも挨拶してくれた。しかし何故か、白髪の男がさっきからずっと俺を睨んでいる。まあ無視しておこう」

「何で遠坂が此所にいるんだ！？」

「サーヴァントの気配と、それとは違う魔力を感じたからよ」

「遠坂は衛宮にそう伝えたと今度は俺を見る」

「夜月君はどうして此所に？」

「衛宮と一緒に帰ったからだが」

「そう、まあいいわ。衛宮君まさか貴方が魔術師だった何てね」

「遠坂も魔術師なのか？それとサーヴァントとか、マスターって何なんだ？教えてくれ」

「衛宮君、貴方何も知らないの！？・・・いいわ教えてあげる聖杯戦争について」

「本気が凜？」

「何も知らない相手を倒しても意味ないでしょ？」

まあ確かにフェアじゃないな

「全く君は」

白髪はそう言つと、目の前から消えた

「マスター彼女の説明を聞いたほうがいい。マスターは情報を知らなすぎる。これからの戦いの為にも、聞いたほうがいいでしょう」

「分かった。じゃあとりあえず皆家に入って話そう」

「分かったわ。・・・夜月君、貴方も来てもらおうよ」

「了解」

俺達はひとまず、衛宮邸に入り説明を聞くことになった

## 衛宮邸での戦い（後書き）

次回は説明と教会に向かうところまでだと思っています

では次回も宜しくお願いします

## 教会での会話（前書き）

教会での神父との会話です。

では宜しく願います。

## 教会での会話

「・・・聖杯戦争。魔術師通しの殺し合い。今町で、そんなことが始まるうとしてた何て！」

衛宮邸に入り遠坂は、俺と衛宮に聖杯戦争やマスター、令呪について説明してくれた

衛宮は、真剣に聞いているようだが俺は聖杯戦争やサーヴァントが何なのか知っている為ほとんど聞いていなかったが

「衛宮君はマスターだから、聖杯戦争に参加は確定ね。貴方はどうするの夜月君？」

「どうするとは、どういう意味だ？」

「今聖杯戦争の話を聞いて、夜月君はどうする気？」

「どうもしない。戦闘になるなら、自衛の為に戦う。それだけだ」

本当は、全員倒してやるみたいなことを言いたいのが止めておこう

「魔術師でもない夜月君が、サーヴァントをどうにか出来ると思ってるの?」

「ランサーと二回戦闘をし、一回宝具を喰らったが生きていると俺が言ってもそう思うか?」

「「「「!?!?!」」」」

全員驚いてるようだな。まあ只の人間が、サーヴァントと戦い宝具まで喰らって、生きていると知ったら当然か

「・・・その左腕の力かしら?」

遠坂が左腕を凝視している。魔力はランサー戦の後、かなり抑えているんだが気付かれるか

「さあな。場合によっては、敵になるかもしれないんだ。自分の手の内を言うと思うか?」

「思わないわ。貴方は衛宮君と違って、お人好しじゃなさそうだから」



「まあお前と白髪が、俺に仕掛けてこなければ俺は何もしないよ」

だがさっきから目に見えないが、白髪が俺を睨んでるようだ

どうやら俺を警戒してるようだな。・・・まさかイレギュラーだとバレたか？一応俺も警戒をしておこう

「分かってるわ。私も関係ない人間を巻き込む気はないから」

「衛宮、お前もだ。さっきのセイバーの件は許してやるが、次に攻撃されたらお前相手でも容赦はしない」

「分かってる。セイバー彩雅に攻撃するなよ」

「いささか納得いきませんが、分かりました」

とりあえず当分は、コイツ等と一緒に戦うとしよう。問題は白髪だな。まあどうするか、ぼちぼち考えていこう

「じゃあ聖杯戦争について、分かったところで行きましょう衛宮君」

「行くって何処に？」

「聖杯戦争の監督役のところよ」

監督役か。前は確か言峰の親父だったが今回は誰何だ？

「監督役？そんなのがいるのか？」

「ええ、かなり嫌な奴だけど。夜月君はどうする？一緒に来る？」

「・・・一人になったら、狙われるだろうから俺も行く」

俺がそう告げた後、全員衛宮邸を後にした

「なあ彩雅、そんなに間をあけて歩かなくてもいいんじゃない？」

「お前等と一緒にされたくないからだ」

現在監督役の所へ向かっているが、俺は衛宮達から10mほど離れて歩いている。その理由は

「マスター、幾ら何でもこのような格好は・・・」

セイバーは霊体化出来ないらしく、鎧の上に黄色の雨ガッパを着るという、不自然な格好をしている

雨も降ってないのに、雨ガッパ何か着てる奴と一緒に歩いてたら、人目が気になる為俺は距離をあけて歩いているのである

そう言えば、zeroでもセイバーって霊体化してたか？記憶にないが、まあいいか別に俺のサーヴァントじゃないし

「苦労するわね。未熟な魔術師と契約しちゃったばかりに」

遠坂が、哀れむようにセイバーに告げる。実際今のセイバーって、zeroより弱いんじゃないか？衛宮はまだ未熟な為、恐らく魔力が足りない。下手したら、約束された勝利の剣使<sup>エクスカリバー</sup>ったら魔力切れて倒れるんじゃないか？いや最悪、第四次のバーサーカーみたいに自滅するんじゃない？

「着いたわ。此所が監督役がいる言峰教会よ」

セイバーのことを考えていると、目的地の言峰教会に着いたようだ。  
・・・待て言峰教会だと？なら今回の監督役は奴か？

「さあ、行きましょう衛宮君。夜月君はどうするの？」

「・・・俺も行くぞ」

奴がどうなったのか、見てみたいからな

「セイバーはどうする？」

「私は此所で敵に備えます。気をつけて下さいマスター」

「凜、私も此所で待とう」

霊体化を解除した白髪が、凜にそう告げる

「分かったわ。アーチャー」

白髪のクラスはアーチャーね。あれ？セイバーと戦ってた時、双剣使ってたような気がしたが

「じゃあ行くわよ」

遠坂と一緒に、俺と衛宮は言峰教会に入った

「その監督役の男は、信用出来るのか？」

「一応この神父とは、古い付き合いだから大丈夫の筈よ」

やはり遠坂は、言峰が父親の時臣を殺したということを知らないようだ。更に、母親の遠坂葵が壊れちゃったのも、言峰のせいだと知らないんだな

だが、今伝えるべきではないな。余計な混乱を生むだろうし、俺の正体に気付かれても面倒だ

「このような夜更けに何用だ凜？まさかお前が最初の脱落者か？」

教会の扉を開くといった。薄ら笑いながら奴は其所にいた

「違うわよ。七人目のマスターを連れてきたのよ」

「ほう。君か七人目のマスターは？」

言峰が俺を見ながら言う。・・・何だ？実際に会ってみると、この男かなり気に入くわない。俺の心を見透かしているような目。俺を嘲笑うかのような目

「違う。七人目はコイツだ」

苛つきを抑え、衛宮を指差して言峰に告げる

「そうか、それはすまなかった。君の左腕から魔力を感じたものだな」

また薄ら笑い俺を見る。凄まじいほどコイツと喋ると不愉快だ

「私はこの聖杯戦争監督役の、言峰綺礼だ。少年君の名は？」

「衛宮士郎」

「衛宮士郎。ふっそうか」

その後、何か衛宮に言っているようだったが、俺は教会内を見回してた為聞いてなかった

中は思ったより綺麗だ。だが何だ？この教会内から、かなりの血の臭いがする。一人や二人じゃない。かなりの数と思われる人間の血の臭いが

まるで目を瞑ったら、戦場の真っ只中にいるような感じになるくらいだ

人殺しの仕事何かしてなきゃ、気付かなかっただろう

「それでは、衛宮士郎を最後のマスターと認めよう。ここに聖杯戦争の開幕を宣言する。各自、己の信念に従い存分に競い合いたまえ」

話が終わったのか、言峰がそう宣言する声で俺は思考世界から戻って来た

「それじゃあ、ここはもう用はないわね。行くわよ衛宮くん」夜月君

「あ、ああ」

「・・・・・・」

遠坂が衛宮を連れて、出て行くようにすると

「喜べ、少年君の願いはようやく叶う」

言峰が、出て行く衛宮にそう告げる。衛宮は一瞬振り返り言峰を見て扉が閉まった

「皮肉なものだ。誰かを救いたいと思う願いは、同時にそれを行う悪の存在が必要なのだからな」

コイツ、衛宮の何かに気がついたのか？

「悪の存在。そんな者がいなくても人は救えるだろ？」

「何、彼のように純粹に人を救いたいと願うのなら、悪の存在が人を苦しめればその願いは容易く叶う」



薄ら笑いながら俺に言峰は告げる。笑いながら、言う言葉じゃないだろ？

「さて、君はどうする？一般人である君も、彼等と共に聖杯戦争に参加するのかね？」

「聖杯戦争何かに興味はない。だが・・・アンタはまっとうな監督役なのか？」

「まっとうとは、どういう意味かね？」

「親父みたいな奴じゃないのかと、言えば分かるか？」

「・・・少年よ。何故君が私の父を知っている？」

さっきと感じが変わった。明らかに殺気を感じる

「自分で考える。・・・それと質問に答えてくれ。アンタは親父と違って、まっとうな監督役なのか？」

「当然だ。私は公平にこの聖杯戦争を監督する」

全く信用出来ねえな。コイツが過去に何をやったのかを知っていると

「そうか」

そう言峰に言っと、俺も扉に向かう

「少年よ。名は？」

言峰は、俺が扉を開く直前に俺に聞いてきた

「夜月彩雅」

「では夜月彩雅、君は一体何者だ？」

「俺はただの人間だ。・・・まあアンタ以上に、今回の聖杯もまっとうな物が分からないがな」

この男と会って、分かったことがいくつかある。一つは、今回の聖杯戦争もまっとうな戦いには、ならないということ。二つ目は監督役の言峰が、必ず何か暗躍をすること。最後は、あの男は完全に悪しか好めない自分を受け入れたということだな

もう一度言峰を見て、俺は扉を閉め外に出た

「遅かったな彩雅」

「悪い待たせた」

衛宮達と合流し教会を出ると

「セイバー、俺はこの戦いを見過ごせない。だから俺は、マスターになる事を受け入れた」

どうやら、覚悟は教会内で出来たようだな

「それでは！」

「ああ、色々と頼りないマスターだけどよろしく頼む」

衛宮はセイバーに手を差し伸べ、セイバーもその手を取った

「はい、マスター」

「そのマスターってのは、やめてくれないか？俺のことは士郎って

呼んでくれ」

「はいシロウ、ああこの呼び方は実に好ましい」

好ましいねえ。別に何も変わらない気がするんだがな

「とりあえず帰るぞ。嫌な予感がするからな」

何だ？さっきから身震いがする。恐怖？いや武者震いか？とにかく何かがある気がする

「じゃあ私は此所で。次に会う時はお互い敵同士よ」

遠坂が、俺達の別方向を歩き俺達に言う

「俺は遠坂と戦うつつもりはないって」

「呆れた。まだそんなこと言うとは思わなかったわ」

「腹をくくれ衛宮、これは殺し合い何だからよ」

「それでもやっぱり・・・」

これは、予想以上の甘ちゃんだな。衛宮切嗣よりも、手におえないかもしれないな

「衛宮君にそのつもりは無くても、私のことは次に会ったら人間だと思わないほうがいいわよ」

人間だと思わないほうがいいか。俺は人間という生き物は、人の皮をかぶった化け物だと思ってるが

「ねえ？お話はまだ終わらないの？」

「「「「！？」」」」

俺達の後ろから声がし振り返ると、其所には銀髪の長い髪に赤い瞳の少女と、腰以外裸で強靱な肉体をしたでかい男が立っていた

## 教会での会話（後書き）

次回は狂戦士との戦闘です。

ではまた次回も宜しくお願いします。

## ホムンクルスと狂戦士（前書き）

狂戦士との戦闘です

では宜しくお願いします

## ホムンクルスと狂戦士

あの銀髪の少女、俺の記憶が正しければイリヤスフィール・フォン  
アインツベルンか。またも懲りずに、アインツベルンはマスターを  
送り込んだようだな。確かアイリスフィールが、前回体内に聖杯を  
内蔵していたな。なら今回は、イリヤスフィールの体内に聖杯はあ  
るのかな？

「やばい。アイツ桁違いだわ」

遠坂が大男を見ながら呟く。・・・ずっと感じてた身震いは、アイ  
ツがいたからか

だが確かに、アイツは見た目だけじゃなく、雰囲気や気配でもやば  
い感じがするな

「初めましてお兄ちゃん。私の名前はイリヤスフィール・フォンア  
インツベルン。こっちがサーヴァントのバーサーカー」

やはりバーサーカーか。なら奴の持っている、あの石で出来た斧剣  
が宝具か？試しに創り出し、情報を引き出してみるか？・・・待て、  
あんな全てが石で出来た斧剣など、俺何かが持てるとは思えない。  
創造は止めておこう



それに武器が宝具とは限らん。もしかしたら、常時開放型の宝具かもしれない。何れにせよ、注意を怠らないようにしなければ

「アインツベルン！それって御三家の」

「遠坂、アインツベルンって何なんだ！？」

「聖杯入手を宿願として、毎回聖杯戦争にマスターを送り込んでる奴等よ」

確か俺の記憶では、前回と前々回にも聖杯戦争に参加してたな

「何で君のような子供が、殺し合い何かに参加してるんだ！？」

「リンが言っただしょ。アインツベルンの宿願の為よ。・・・それとお兄ちゃんを殺す為」

衛宮を殺す為？この娘はどうやら、衛宮個人に怨みがあるようだな

恐らくアインツベルンに、衛宮切嗣はお前とアイリスフィールを捨て、アインツベルンを裏切ったとも言われたからだろう

まあ衛宮に付きつきりで、彼女の所へ行かなかった衛宮切嗣にも責任はあるな

「ところで、隣のお兄さんは誰？見たところ一般人みたいだけど」

「お初にプリンセス。自分の名前は夜月彩雅。以後お見知りおきを」  
一礼しながら、自身の名前を告げる。どちらにしろ、名前何か直ぐにバレるだろうしな

「ご丁寧にありがとう。でも、ただの一般人じゃないよねサイガ？」

イリヤスフィールは、俺の左腕を見ながら告げる。やっぱりバレたか

「一般人だろうと、どっちにしろ殺す気だろ？」

「うん、勿論」

笑顔で頷いてきた。普通子供に殺す気か？って聞いて、子供が笑顔で頷いちゃいけないだろ

まあ殺す気か？何て聞くのも間違ってるか。だが殺される訳にはいかんのだよ！

「悪いが、死ぬ訳にはいかん」

右手に霊子を集中させ、それを矢にして放つ特殊形状の弓、ギンレイコウ銀嶺弧雀ヤクを創り出し飛翔し構える

「喰らえ光の雨」リヒト・レーゲン

上空からバーサーカーに向け、銀嶺弧雀から無数の矢を一斉に放った

「  
……！！」

バーサーカーは咆哮をし、矢を斧剣で弾き出したが数が多く全てを弾けず、地面にも何十何百の矢が刺さりコンクリートが割れ、姿が見えなくなるほど砂塵がまった

「彩雅、いきなり攻撃何て卑怯だろ！」

地面に着地すると、衛宮が俺にそう告げる

「これは殺し合いだ。それに相手が相手だ、そんなことを言ってる場合ではない」

「だからって！」

「やめなさい衛宮君！夜月君の言ってることが正しいわ。これは殺し合いなのよ」

「無駄だリン。この男には何を言っても無意味さ」

「何だと！」

「アーチャー！シロウを侮辱する気ですか！？」

五月蠅い奴等だ。戦闘中だというのによ

「お前等戦闘中だ。それにあの程度でバーサーカーは倒せん」

「よく分かってるねサイガ」

イリヤスフィールが、笑いながら俺に告げる。やはり死んでいないか。バーサーカーめ、理性を失ってもイリヤスフィールを守ったよ  
うだな

砂塵がはれ、バーサーカーのいた場所を見ると

「な！あれだけの攻撃を喰らって無傷って！？」

其所には、無傷で立っているバーサーカーとイリヤスフィールの姿があった。まさか光の雨を<sup>リヒト・レーゲン</sup>まともに喰らって無傷とわ予想外だ

「.....」

再度バーサーカーに数百発の矢を射るが、矢はバーサーカーの斧剣に弾かれ、更には身体に当たった矢は粉々に砕けていた

恐らく、一定の威力の攻撃以外は通用しないのだろう

「無駄よ。バーサーカーにそんな数だけの矢何て喰らわないわ」

「矢が喰らわないのなら！」

セイバーがバーサーカーに接近した

「  
」!

咆哮しながら斧剣と不可視の剣がぶつかった

「くう  
」

しかしセイバーは、力負けし俺の所に吹っ飛ばされた

「大丈夫かセイバー？」

「はい。私は問題ありませんサイガ」

セイバーを受け止め尋ねてみたが、吹っ飛ばされただけで大丈夫そう  
うだ

「  
」!!

バーサーカーは、咆哮しながら俺達に向かってきた

「シロウには、指一本触れさせません！」

再びセイバーが、バーサーカーに向かって行った

「アーチャー！」

「分かっている。夜月彩雅、貴様も弓が使えるならセイバーを援護しろ！」

「生憎、弓は余り使わねんだよ。衛宮、俺はセイバーと一緒に斬り込む。お前はこの銀嶺弧雀で、俺とセイバーを援護してくれ」

銀嶺弧雀を衛宮に渡しながら告げる

「お前、あんな奴を相手に接近戦する気か！？死ぬ気なのか！？」

「衛宮君の言う通りよ。死にたくないならやめときなさい夜月君」

「リンの言う通りだ。君は私と共にセイバーの援護に徹しろ！」

三人は俺を止めるが、俺は止まる気はない

「悪いが死など怖くないんでな。行かせてもらつ。援護は任せたア  
ーチャーと衛宮に遠坂」

左手に、自身の刀を抜きそう三人に告げると、俺はセイバーの元へ  
向かった

「  
」

「危ねえな」

俺に振るわれた斬撃を避けたが、これはまともに打ち合つたらまず  
勝てんな

「サイガ！何故来たのです！？」

「お前を援護する為だ」

「しかし、人間の貴方では無理です！」



確かに普通の人間なら無理だな。だが俺は普通じゃない

「心配は無用だ。それにそんなこと言ってる暇はない。セイバー協力して奴を仕留めるぞ」

「分かりました。ですが無理はしないでくださいサイガ」

「分かっている。喰らえ火遁・豪火球の術」

向かってくるバーサーカーに、等身大ほどの火の球を発射しバーサーカーに当たった瞬間爆発したが

「  
！」

バーサーカーは豪火球を喰らっても、ビクともせず向かってきた

「ち！」

斧剣の横風ぎを刀で受け、身体をしゃがませ受けながすと後ろからは、矢の雨と魔力弾がバーサーカーに炸裂し、セイバーがその隙に接近し、バーサーカーは斧剣を振るったが

「火遁・豪火球の術！」

斬撃を、豪火球と衛宮達の矢の雨で無理やり、軌道を反らしてやり  
斧剣は空を斬り

「ハアアア！」

セイバーが、不可視の剣を身体に振るっただが

「何！」

しかしセイバーの剣は、バーサーカーの身体に弾かれた。またセイ  
バーは、斧剣で攻撃をされ防いでいるがあのままでは

「  
！」

「ちい！」

バーサーカーに向かっていったが、攻撃され奴の斬撃に反応したが  
ガードに使った刀が、斬撃で弾き飛ばされてしまった

「！」

「くそ！」

「サイガ！」

後ろに、セイバーと共に下がり合流する

「規格外過ぎるだろ」

「当たり前よ。バーサーカーはギリシャ神話の大英雄ヘラクレス何だから」

何だとヘラクレスだと！？

「サーヴァントとは、英雄の魂を現世に呼び出した者。それくらいは知ってるわよね？ 霊体である彼らの存在は、そこに住む人々の認知度に強く影響されるわ。ゆえに、広くこの世に知れわたった英雄ほど強力になる。だからヘラクレスに勝てる者何ているわけない。バーサーカーにとって、セイバーにアーチャーそしてサイガ、貴方達何てただの雑魚と一緒よ」

「ただの雑魚ねえ」

イリヤスフィールを見ながらそう呟く。侮ってもらっては困るな

「サイガ下がってください。剣の無い貴方がいても足手まといです」

「セイバーの言う通りよ。下がりなさい夜月君」

「それは聞けんな、それに下がるのはお前だセイバー」

左手に剣を創り出し、セイバーにそう告げる

「な！サイガその剣は！？」

「驚いた。何でサイガがその剣を持っているの！？」

二人が驚くのも当然だ。俺が今左手に持ってるのは、両刃の剣の聖剣デュランダルなのだから

「イリヤスフィール、一つ頼みがあるんだがいいか？」

「何？見逃してくれとでも言う気なの？」

「ああ、その通りだ。だがそれは俺がバーサーカーを一回殺したらだ」

「・・・サイガ、貴方バーサーカーの宝具に気が付いたの？」

「ヘラクレスで有名なのは、最後の焼死と十二の功業だ。もしかしたらと考えてみたが、まさかバーサーカーの宝具は常時開放型で一回蘇生する宝具とはな」

だが恐らくまだ何かあるだろう。一定の攻撃を喰らわないか、一定ランクの宝具では傷もつけないなど

「いいわ。バーサーカーを一回殺したら見逃してあげる。そんなこと絶対に無理だから」

「そうか。ならセイバー、俺が一人で奴を殺す」

「サイガ、いくら貴方がその剣を持っていたても無理です！全員で協力して奴を倒すべきです！」

「やってみなければ分かんさ」

そうセイバーに告げると、再度バーサーカーに向かう

「サイガ！」

「やりなさいバーサーカー。お兄ちゃんの前に、サイガを殺しなさい！」

「  
！！」

（魔眼開放 モード直死！）

向かってくるバーサーカーの前に、俺は自身の魔眼を開放した

「くーっう」

頭に、痛みがはしるがそれに耐えバーサーカーを見る

（ち！点は見えないか）

俺の魔眼の一つ直死の魔眼は、遠野志貴や両儀式のように精神集中したりして、点が見える訳ではない

不安定過ぎる為見える時もあれば、見えない時があるといった状態である

無論点が見える時は、頭が割れるような激痛に襲われるが

点が見える確率は、恐らく三十%といったところだろう

だが死の線は、はつきり見える為殺すことは出来る

「  
！」

「五月蠅いんだよデカブツ！」

降り下ろされた斧剣の線をなぞり、真つ二つに斬り裂き

「  
！」

「黙れと言ってるのが聞こえないのか？」

左腕のストレートを避けず逆に腕の線をなぞりバラバラに斬り裂き

「終わりだ」

「！」

そのまま、バーサーカーの首の線をなぞり斬り飛ばした

援護側 side

「バーサーカーを、あんなにあっさりと殺した何て」

「なあ、一体今彩雅は何をしたんだ？」

援護側の三人は啞然としながら、バーサーカーを殺した彩雅を見ていた

「どうやら、何か特殊な方法を使いバーサーカーを一瞬にして殺したようだ」

「あの剣の力じゃないのか？」



衛宮がアーチャーに問う

「確かに、あの聖剣デュランダル之力なら、真名開放で奴を殺すことが出来るかもしれん。だが奴はそれをせず通常状態でバーサーカーを殺した」

「夜月君が、真名開放以外の何らかの方法で殺したのは明らかね」

「でもだからって、あんな簡単に殺せるのか？あんな化け物みたいな奴を」

「それは夜月君に聞けば分かるわ。後で彼に聞きましょう」

「いいのかリン？今の内に、始末したほうがいいと私は思うが」

アーチャーは遠坂にそう告げるが

「殺すよりも、同盟を組むことにしましょう。彼と同盟を組めば、かなりの戦力になると思うから」

遠坂は、彩雅の戦闘能力を見て同盟をすることにしたようだ

「君が、そう言うのなら私は構わないが」

アーチャーは再び彩雅を見る

（奴は何者だ？本来この聖杯戦争に、夜月彩雅などと言う人間は存在しなかった筈。それに奴の持っている、あの聖剣デュランダルは解析の結果本物ということも分かった。何故ただの人間の奴が、本物の宝具を所持している？何にせよ夜月彩雅、更に警戒が必要なようだな）

「アーチャー、アーチャー！」

「あ、すまないリン。何かね？」

アーチャーは彩雅を見るのを止め遠坂を見る

「まだ何がおこるか分からないから、警戒を怠らないでねアーチャーに衛宮君」

「分かっているリン」

「分かつてる遠坂」

二人は再度弓を構え、バーサーカー達のほうを見る

援護側 s i d e o u t

イリヤ s i d e

「嘘！」

私の目の前で、バーサーカーがあっさり一回殺されてしまった

ただの人間であるサイガに、最強のバーサーカーがあっさと

「サイガ貴方は一体何者？」

私はそうサイガに聞いていた

イリヤ side out

（魔眼開放停止、モード通常。リミットまでに殺せたか）

魔眼を元の目に戻し、セイバーの所へ向かおうとすると

「サイガ、貴方は一体何者？」

イリヤスフィールにそう問われた

「ただの人間だよ。・・・まあちょっと人間離れてるが」

「そう。・・・今回は見逃してあげるけど次はないから。行こうバーサーカー」

「！」

バーサーカーは蘇生し、イリヤスフィールを肩の上に乗せると闇に消えていった

「大丈夫ですかサイガ？」

「ああ、ちょっと頭が痛いぐらいだ」

セイバーの所に向かい、笑いながらセイバーにそう告げる

「終わって早々悪いんだけど、夜月君話があるんだけど」

遠坂達もやってきて、遠坂が俺に告げる

「話なら衛宮の家でいいか？まず座りたいから・・・よ」

いかなな意識が保てん。やはり、久しぶりに魔眼を開眼したせいだな

（こんなんじゃ、サーヴァントには・・・）

俺はそのまま気を失い倒れた

## ホムンクルスと狂戦士（後書き）

今回は学園の話になると思います

では次回もよろしく願いします

## 騎乗兵との遭遇（前書き）

今回は騎乗兵と会います

では宜しくお願いします

## 騎乗兵との遭遇

「・・・此所は？」

目を開けると、知らない天井が目に入った

恐らく衛宮の家だろう。魔眼を開眼したせいで倒れるとは、やはり暫く開眼をしてなかったせいだな

「痛！」

頭が痛い。全く最悪の目覚めだな

「？何だこれは？」

立ち上がり、枕元にあった制服を着ていると紙が上から落ちてきた

『やあ管理者だよ。一息ついたみたいだから、説明しとくよ。君の家を用意するの忘れてたから衛宮士郎の家に住んでくれ。一応火事で、家が燃えたって全員に暗示は掛けてあるから。着替えとかは、僕が用意して部屋の隅に置いておいたよ』



内容を確認すると、紙は直ぐに消えてしまった。書かれてた通り部屋の隅を見てみると、確かに衣服が入った段ボールが二つ置かれていた

片方を確かめてみると俺の普段の私服の、紺のジーパンに白のポロシャツ、黒と白の長Tに黒と白のパーカーが入っていた

もう片方には

「・・・これはハザマの衣装か？」

もう一つの段ボールを確かめてみると、中には格ゲーBLAZBLUEのキャラ、ハザマの着ているスーツにYシャツ ネクタイ 帽子などが入っていた

「夜は大体ハザマの格好で、それ以外は私服で行くようにしよう・・・」

また上から紙が落ちてきた

『最後に、サーヴァント召喚の呪文と魔方陣を書いておくから、これを見て自分で召喚したい時に召喚して』

紙を読み終えると、その紙は消えた。すると、数秒後にまた一枚紙が落ちてきた。内容を確認すると、上の部分にサーヴァント召喚の呪文が書かれており、下には魔方阵が書かれていた。この紙は消えないようなのでポケットにしまった

その後制服を着て、段ボールを閉じ部屋を出ようとする襖が開いた

「あ！おはようございます。夜月先輩」

其所には、紫色の少し長い髪をし目が虚ろな女の子がいた。・・・成長した間桐桜のようだ

「・・・間桐桜か。俺に何か用か？」

「はい。先輩に、朝ごはんが出来たから夜月先輩を起こしてきてくれと言われて来ました」

少し微笑んだ顔で俺にそう告げる。あれから十年、更に壊れていないだろうかと思っていたが、まだ全てが壊れてるわけではないようだ

「そうか。悪いな、わざわざ」

「いえ、じゃあ食卓に行きましょう。夜月先輩」

「ああ」

俺は間桐と一緒に食卓に向かった。しかし向かっている途中

「なあ間桐」

「何ですか夜月先輩？」

何故か間桐に声を掛けてしまい

「お前今幸せか？」

「！」

などとうっかり聞いてしまった。簡単に答える訳何かねえのに

「驚かせてすまない。今のは忘れてくれ」

「は、はい」

その後はお互い気まずく、無言で俺と間桐は食卓に向かった

「夜月君、起きたのね。おはよう」

何か、短髪で私服にエプロン姿の女の人が話掛けてきた。誰だこの人？

「おはようございます」

挨拶して適当に座る

「夜月君も災難よね。家を火事で無くして、昨日は道端で倒れてたって士郎から聞いたわよ」

「いえ、其処まで災難ではないですよ」

「士郎と相談したんだけど、夜月君もセイバーちゃんと一緒に士郎の家で暮らせば？」

何時言おうか、考えていたら向こうから言ってくれたよ

「いいのか衛宮？」

「ああ、部屋はたくさん余ってるからな。彩雅がいいんなら俺は別に構わないぞ」

「すまない。ならお言葉に甘えさせてもらっよ」

とりあえず、泊まる所も確保出来たな。・・・後は、向かってくる敵を排除するのみ

現在確認出来る敵は、ランサーにバーサーカー。状況次第ではアーチャーも敵になる可能性もあるな

まだ遭遇してないサーヴァントは、アサシン ライダー キャスタ  
ーの三体か

「夜月君。ぼうつとしてないで、早く食べないと遅刻するわよ」

名前を知らない人が、そう言いながらご飯とおかずをパクパク食べている

「桜ちゃん、お代わり！」

「はい。藤村先生」

名前は藤村ね。どうやら先生らしいな

「私もお願いします」

「はい。セイバーさん」

それにしてもコイツ等、朝からよく食うな

とりあえず、俺も一緒に飯を食った

「士郎に桜ちゃんに夜月君、遅刻しないようにね」

飯を食い終わった後、藤村先生は俺達にそう告げると、速足で衛宮の家を後にしていた

「桜、俺ちよつとセイバーに話があるから彩雅と先に行つててくれ

ないか？」

「分かりました。先輩、遅刻しないように気をつけてください」

「じゃあな衛宮、また後でな」

何故か、俺は間桐と一緒に学校に登校することになってしまった

それにしても、歩いて行く何てだるいな。だからって、神速のスピードで行けないし全く学校とは面倒だな

「で、さっきから俺をチラチラ見て何か用か間桐？」

「す、すいません」

尋ねると、慌てて何回も頭を下げてきた。別に其処まで頭下げなくていいんだが

「別に、其処まで頭下げなくていい。何か用があるのか？」

「い、いえ。今日は普段の夜月先輩と違うなって思っ

普段の俺？俺って普段、どういう設定になってたんだ

「普段と違う？そんなことはないだろ」

「何時も夜月先輩は、無口でほとんど口を聞いているところを見たことがなかったからですよ」

普段の俺は、無口で口を聞かない奴という設定だったのかよ

「そうか。・・・うん？」

そのまま、校門を通過した時何か違和感を感じた

（何だこの違和感は？何かに覆われてるような感じは？）

「どうかしましたか、夜月先輩？」

難しい顔をしていたせいか、間桐が心配そうに俺を見ていた



「いや、何でもない」

「そうですか。じゃあ私は朝練があるので此所で」

「ああ」

間桐と別れた後、俺は直ぐに屋上に向かった

（魔眼開放 モード・直視）

もう一つの、直視の魔眼を開眼した

「何だ、此れは!？」

周りを見ると、赤く太い糸のような物が学園全体を覆っているのが見えた

「これは結界か？」

見た感じ、どのような結界か分からない。だが発動したら、とんでもないことになるような気がする

どうする。今の内に直死の魔眼で破壊しとくべきか？

だが、直死を使って昨日と同じように倒れたら、結界をはった奴に殺されかねん

更に直死は、解除したら一分間のインターバルを必要とする。無論、その一分間は俺は無防備になる為に当然狙われるだろう

恐らく、遠坂や衛宮も結界には気付いている筈。ならアイツ等に任せよう。俺が破壊する時は、最後のどうしようもない時にしよう

（魔眼開放停止　モード通常）

魔眼を解除した後

「影分身」

自身の分身を作り出し

「適当に授業受けて、全部終わったら屋上に戻ってこい」

「了解した」

分身はそう言いつと、屋上を後にした。授業何か受けてられるか面倒くさい

「うん？あの林」

屋上から周りを見てみると、林に目が止まった

「何か、あの林気になるな。・・・行ってみるか」

気配を完全に消し、俺は一人林に向かい走り出した。以外にも、特に何事もなく林に入れた

（魔眼開放 モード・直視）

再び直視の魔眼を開眼し、一ヶ所の地面を見てみると、その地点に魔力が集中している

此所が結界の基点か。なら近くにサーヴァントがいるな

「驚いた。貴方には、この基点が見えるのですね」

後ろから声が聞こえ、振り向いて見ると其所には紫色の長髪で両目には眼帯をし、露出の多い黒い服を着た美人が立っていた

## 騎乗兵との遭遇（後書き）

次回の更新は出来るだけ早くするつもりです

では次回も宜しくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5350y/>

---

Fate 戦いのはてに残るもの

2011年12月25日13時46分発行